



北岡泰典特別書き下ろしエッセイ

**「引き寄せの法則：
『ニューソート』とは？」**

written by 北岡 泰典

July 2023

著作権：（株）オフィス北岡

<https://www.office-kitaoka.co.jp>

目次

1. 前書き
2. 『ザ シークレット』とその源泉の「ニューソート」
3. ワトルズ著『お金持ちになる科学』について
4. 「引き寄せの法則」で効果を得られない理由
5. 後書き

1. 前書き

私は、2001年まで、過去20年くらい欧米に滞在していましたが、常々、英語の「Personal Development」とその訳語である「自己啓発」の間には、かなりのニュアンスの違いがあるのでは、とと思ってきています。

すなわち、私自身の理解ですが、国内では、80年代、90年代に「ライフダイナミックス」という団体（この団体は、「フォーラム」とか「ランドマーク」とも呼ばれていたようです）が開催したセミナーで、参加者が過呼吸症候群で救急車で病院に運ばれたり、自殺者が出た、ということで、「自己啓発 = 危険なセミナー」という方程式が社会に浸透した、ということになっています（私は、欧米に滞在していたので、当時のこの国内の事件は、帰国後話に聞いただけです）。

実は、「ライフダイナミックス」の米国でのルーツは「EST (エアハード式セミナートレーニング)」ですが、ESTは、「『ハードセラピー』の究極版」で、欧米でも、評判はかなり悪いと思います。実際、私は、1985年頃、フランスにいた時（81年から3年間サハラ砂漠で仏語通訳をしていたので、仏語が喋れました）、パリ市内でESTグループの勧誘に遭い、彼らの1週間の合宿に参加したことがあります。参加者は、毎日目隠しをされ、ハードなセラピーワークを受けましたが、最終日に、参加全員が車座になって、合宿の感想を言いあっている時、一人の女性が盥をもって真ん中に進み出て、そこで小水を始めました (!)。

私自身は、1983年に米国の西海岸（オレゴン州）でインド人導師に弟子入りして、そのコミュニンの「国際瞑想大学」の施設で、通算7ヶ月間の「脱催眠療法」というセラピーに参加した時、「エンカウンター」や「プライマル」といったハードセラピーも行われましたが、そのようなセラピーの経験者だった私でさえも、1985年前後の上記のパリの事件は、「ツーマッチ」で、「さすがに、西洋のセラピーもここまで醜悪な形に成り下がったか」と思い、「セラピーを超える方法論」を模索し始めた大きなきっかけにもなった次第でした。

その模索の結果、1988年に、英国ロンドンで開催されたNLP共同創始者のジョン・グリーンダー氏の「個人的天才の必要条件」というワークショップに参加した時、従来の「セラピーを超える方法論」がNLPであることを知った次第です。

非常に興味深いことは、1975年にUCSC（カルフォルニア大学サンタクルーズ校）でグリーンダーとリチャード・バンドラーによって共同創始されたNLPは、当初はセラピーの代替学派の一つとして生まれたのですが（他の場所で言及したことがあります）、創始当初はNLPという名前がついていなくて、単に「メ

タ方法論」と呼ばれていました)、実は、それまでに存在したすべてのセラピーの方法論を超越した、従来のセラピーのようにクライアントの話をいっさい聞く必要のない「コンテンツ フリー (内容とは無関係)」の方法論として生まれたという事実です。

ちなみに、**2001**年に帰国した当時、私の師匠の弟子の方々と会い、「**1975**年の **NLP** 創始以降に誕生した『メジャー』なセラピーは何でしょうかね」という質問をしてみました。もらった答えは、バート ヘリンガーが創始した「ファミリー コンスタレーション (家族の座)」と「オーラソーマ」の二つの学派だけです、というものでした。

思えば、**1975**年以前のフリッツ パールズの「ゲシュタルト療法」、カール ロジャーズの「人間性心理学」、前述の「エンカウンター」、「プライマル」等のセラピーでは、参加者に、過去のトラウマに関連した感情的な吐露を求め、コンテンツばりばりのワークになっていましたが、一連の実験の結果、「クライアントに過去のトラウマを何度再体験させても、そのトラウマはいっさい解消しない」(すなわち、たとえもし人の前で小水をするという体験をさせても、トラウマが悪化することはあっても、解消はしない) という「驚くべき」事実が判明したので、**1975**年に、「クライアントの問題の詳細をいっさい聞く必要のない」、「コンテンツ フリー」の **NLP** が生まれたという歴史的事実があります。

なので、ある意味、欧米で **1975**年に「セラピーの打ち止め」の方法論として **NLP** が生まれたので、それ以前はセラピーの学派が「乱立」していた一方で、それ以降は、コンテンツ寄りのメジャーなセラピーが、上述の二つの学派以外は、いっさい生まれていないのは、いわば、当然といえば当然の話です。

実は、**1975**年の **NLP** 創始時に、英語で言う「**Personal Development**」業界では「革命」が起こっていて、この年を境にして「パラダイム シフト」が起こっているのですが、残念なことに、上述のように、国内では、「ライフダイナミックス」によって「自己啓発」が「ダーティ フォー レター ワード (卑猥で汚い言葉)」になってしまっていた状況の中、**2000**年前後に、(あくまでも、パラダイムシフト「後」の **Personal Development** の方法論の一つの) **NLP** が日本に輸入された時、(セラピーの歴史がほぼ皆無だった国内では、そのようなパラダイムシフトがあったことに誰も気づいていなかった) **NLP** は単に「従来」の自己啓発系の方法論の一つである、という立ち位置でしか見られなかったことに、日本では、「本場の **NLP**」がほとんど紹介されてきていないという極めて残念な歴史の原因があった、と私は、見ています。

以上は、西洋と国内のセラピーと NLP を比較した事情解説でしたが、私は、個人的には、本エッセイのテーマである「ニューソート (新思潮)」にも、欧米と日本では、紹介のされ方には、かなり大きな違いがある、と思っています。

すなわち、欧米では、「ニューソート」は、(歴史的に確固とした地位を築いてきている)「Personal development」の「Self Help (自助)」のカテゴリーに分類されるかと思いますが、国内では、(「ライフダイナミクス」事件後)「悪名高き『自己啓発』」の一分野であると思なされてきていると思われま

本エッセイでは、「ニューソート」の歴史は、正当なものであり、国内で言う単なる「自己啓発」の「浅い方法論」ではない、ということ力を説きたいと思

ちなみに、最近、私は、ある方からウォレス ワトルズ著『お金持ちになる科学』を紹介されたのですが、この方は「ニューソート」のことを知りませんでした、個人的には、欧米では、これはありえないと思

(このことに関連して、一つ驚いたのは、私が参照したワトルズ著『お金持ちになる科学』の翻訳書のどこにも「ニューソート」の言及がなかった点です。)

私は、この方の「無知」を個人的に責めている、というよりは、日本人全体が、戦後の「GHQ/マッカーサー体制」の教育によって、あることの源泉を調べることをしなくなっている (たとえそれが自分が今いる業界のことであっても、です) マインドセット一般を批判している立場にいます。

たとえば、NLP をある団体で学ぶ場合、(どの団体で学んでも同じ NLP が学べる (これは、単に「ありえない」です) と信じきっているせいか) その団体の先生がどういう人々から学んだか、をいっさい調べないようですし、NLP がどこから来ているのか、また、かりにもしその源泉がセラピーにあるのであれば、どういうセラピーの歴史を辿って、1975 年に NLP が生まれたのか、等を調査/精査したりすることは、いっさいないよう

2. 『ザ シークレット』とその源泉の「ニューソート」

注: 『ザ シークレット』についても、「ニューソート」についても、一般的な情報は、Wikipedia等で得ることができるかと思います。本エッセイでは、主に、著者が知り得ている（一般的ではない）情報をお伝えしたいと思いました。

私独自の見解の発表の場となっておりますが、読者の方には、それなりに強い興味をもっていただける内容になっているのではと思っています。

本エッセイのテーマである「ニューソート（新思潮）」を 21 世紀に「リバイバル」させたのは、ロンダ バーン著の『ザ シークレット』でした。

2006 年に出版された「自己啓発書」の『ザ シークレット』は、約 20 人の「モチベーション スピーカー」のインタビューを集めた映画『The Secret』の書籍版です。

同書で紹介されている「モチベーション スピーカー」のリストは、以下のようになっています。

Bob Proctor、Jack Canfield、Joe Vitale、Lisa Nichols、Michael Beckwith、John Assaraf、James Arthur Ray、John Demartini、Marie Diamond、Esther Hicks、Jerry Hicks、Mike Dooley、Denis Waitley、John Gray、Hale Dwoskin、Bill Harris、Fred Alan Wolf、Lee Brower、John Hagelin、Neale Donald Walsch

このうち、**Joe Vitale** は、私の師匠の弟子で、1983 年頃オレゴンのコミュニンに滞在していたという情報を、私はもっています。私も、1983 年と 1985 年の春から秋にかけてにコミュニンにいたので、「モール（ショッピングセンター）」で、私が、通りを歩いている時、ヴァイタリ氏と会って、「ハロー」といった挨拶を交わして、「ハグ」した可能性が高い、と思っています（以下に、コミュニンのモールの写真を掲載しておきます）。



また、John Demartini については、ディマティーニ氏が日本でワークショップを開講した時、私は参加受講して、挨拶を交わさせていただきました。同氏のテクニックの一つが、私が独自開発した「天命を知る」テクニックと原理がまったく同じであることを知って、驚いた次第でした。

ちなみに、その原理とは、現象界に現れているすべての「願望」(あるいは「煩惱」)には、目に見えない高次の「肯定的意図」があり、その高次の意図の意図の意図を探っていくと、第一に、自分の中の究極の最高次元の目的(「天命」のことです)を特定できますし、第二に、自分の最高次元の目的と他の人の最高次元の目的を擦り合わせることも可能になっています。

『ザ シークレット』は、21 世紀において「引き寄せの法則」をリバイバルさせることで、ベストセラー書となりました。

この「引き寄せの法則」は、19 世紀から 20 世紀にかけて世界に影響を与えた「ニューソート (新思潮)」の運動と密接な関係があります。

日本でも知られている『人を動かす』のデール カーネギー、『思考は現実化する』のナポレオン ヒル、『眠りながら成功する』のジョセフ マーフィー、私とその弟子だと理解しているネヴィル ゴダード、中村天風に影響を与えたウィリアム ウォーカー アトキンソン、「成長の家」創始者の谷口雅春、京セラの稲盛和夫、船井総研コンサルタントの船井幸雄等に影響を与えたジェームズ・アレン等が、ニューソートの代表的な思索家でした。

また、現代の国内外の「スピリチュアリティ (精神世界)」の運動の源泉は、『秘密の教義』の著者で、「神智学」創始者のマダム ブラヴァツキーに遡ることができますが(精神世界で頻繁に言及されている「エーテル体」、「アストラル体」、「コーザル体」等の概念は、神智学が発端となっています)、この「スピリチュアリティ」の運動もニューソートから多大な影響を受けて誕生したという経緯があります(ちなみに、私は、日本の新興宗教の教義のほぼすべては、ブラヴァツキーの『秘密の教義』のパクリである (!)、ということを知ったことがあります)。

ニューソート運動は、明治後期から昭和初期にかけて、国内の経営者、宗教家、思索家に多大な影響を与えました。

ニューソート運動の骨子は、「思考は現実化する」、「引き寄せの法則」にあると思いますが、このことは、後述のウォレス ワトルズの『お金持ちになる科学』の以下の文章（「第 4 章」）で、簡潔に解説されています。

- 「1) すべてのものを生み出す『思考する本質的存在』が存在します。そして、それはもともと、宇宙全体に浸透し、しみとおり、充ち満ちています。
- 2) この『本質的存在』のなかで思考がなされると、その思考によってイメージされたものがつくり出されます。
- 3) 人は自分の思考したものに形を与えることができます。『形なき本質的存在』に思考を刻むことによって、人は考えたものを現実のものとしてつくり出すことができるのです。」

ちなみに、ロンダ バーン著の『ザ シークレット』には「種本」がある、と言われていて、巷では、以下の二冊のうちのいずれかではないか、と言われていています。

それらは、ウィリアム ウォーカー アトキンソン著の『引き寄せの法則』（1906年）とウォレス ワトルズ著の『お金持ちになる科学』（1910年）です。

次章では、アトキンソンとワトルズについて語らせていただきます。

3. ワトルズ著『お金持ちになる科学』について

第 2 章でも述べさせていただいたように、2006 年に刊行されたロンダ バーン 著の『ザ シークレット』の「種本」は、ウィリアム ウォーカー アトキンソン 著の『引き寄せの法則』(1906 年) か、ウォレス ワトルズ著の『お金持ちになる科学』(1910 年) か、のいずれかだと言われているようです。

21 世紀初頭のベストセラー書のルーツが 100 年も前の古典書にある、ということは、実に興味深いと思います。

私自身、ウィリアム ウォーカー アトキンソンについては、80 年代に「精神修行」をしていた頃から名前を知っていましたが、『ザ シークレット』刊行後に、アトキンソンについて、改めて一定以上の読書研究をしてみました。個人的には、極めて重要なニューソート系の VIP 思索者ではないか、と思いました。

アトキンソンは、いくつかのペンネームをもっていたようですが、特に、インド人ヨガ行者としての「ラマチャラカ」の筆名で書いた、『ラージャ ヨガ』を含むインド思想に関する書籍は、非常に興味深い内容になっています。

私自身、『お金持ちになる科学』の著者のウォレス ワトルズの名前は知っていましたが、実は、つい最近、ある方からワトルズ著の『お金持ちになる科学』について読むように強く勧められ、それ以来、毎日、書籍の一部を読み直してきています(特に、第 4 章、第 7 章、第 11 章、第 14 章を読むように勧められました)。

(私は、英語原書版を読んできていますが、この方は「ぜんにち出版」の「松永英明翻訳版」を参照されているようです。実は、著作権の期限については、著作物を創作した時点から著作者の死後 70 年を経過するまでと定められているので、ワトルズ著の『お金持ちになる科学』の翻訳版は、巷では、数多くの異なるバージョンが出版されているようです。)

「前書き」でも書きましたが、『お金持ちになる科学』を私の勧めたこの方が「ニューソート」のことを知らなかったことが、本エッセイを書く動機となっています。

ワトルズ著の『お金持ちになる科学』の主張の骨子は、第 2 章でも述べた、以下の点にあります。

- 「1) すべてのものを生み出す『思考する本質的存在』が存在します。そして、それはもともと、宇宙全体に浸透し、しみとおりに、充ち満ちています。
- 2) この『本質的存在』のなかで思考がなされると、その思考によってイメージされたものがつくり出されます。
- 3) 人は自分の思考したものに形を与えることができます。『形なき本質的存在』に思考を刻むことによって、人は考えたものを現実のものとしてつくり出すことができるのです。」

私は、ワトルズの言う「形なき本質的存在 (Original formless substance)」は、過去の私の「レモンの味を知らなくてもレモンの味を創出できる方法論:完全解説」のエッセイで紹介したロバート シャインフェルドの「ザ プロセス」メソッドで言う「純粹意識」と相互関連があると見ています。

すなわち、シャインフェルドの「ザ プロセス」メソッドは、一定のマントラを唱えることで、「本当の自分」は純粹意識であることを認め、現象界が幻想であることを認め、その背後の純粹エネルギーに気づき、そのエネルギーを自分に取り戻し、本来の自分を表現して、純粹意識と現象界に感謝することで、現象界をいかようにも操作できるようになる、という手順になっている一方で、ワトルズのメソッドでは、「形なき本質的存在」(シャインフェルドの言う「純粹意識」)に思考を刻め込めば、必ず、その思考が現実化する、というメカニズムになっています。

ちなみに、ワトルズは、原書では、「形なき本質的存在」の思考が現実化する際、通常は、現象界ですでに具体化されている手段を使ってでしか現実化されないで、必然的にどうしても時間がかかってしまうが、代替法として、もしかりに「現象界ですでに具体化されている手段」を通さずに、直接じかに「形なき本質的存在」に働きかけることができたなら、その思考は即時的に現実化される、という、実に極めて興味深く、いわば、「オカルト力の実現法」を示唆しているのではないかと思われることを指摘していますが、どうも松永翻訳版では、その点が、明確に翻訳されていないように見受けられました。

ちなみに、私は、最近、独自開発したテクニックをもとに、「メタ心理学」メソッドを創始しましたが、これらの独自開発テクニックは、シャインフェルドの「ザ プロセス」メソッドにかなりの影響を受けています。

すなわち、「RPG ゲーム」、「Meta Mea Work」、「鏡の国のアリス」といった私独自テクニックは、シャインフェルドの「純粹意識 vs 現象界」の構図に影響を受けていて、その上で、これらのテクニックは、「体（現象界）から心（自己）を抜き、その心を魂（観照者）が浄化させて、再度体に戻す」という「ボディ／マインド／スピリット」の三者の整合性を取ることを可能にさせています。

北岡独自開発のテクニック群がどのようにしてボディ／マインド／スピリット」の三者の整合性を取ることができるようになったか、についての実際的なケーススタディについては、「クローズド」の形で、北岡個人セッションワークの受講者の方に、直接的／体験的解説をさせていただきたいと思っています。

4. 「引き寄せの法則」で効果を得られない理由

私は、「ニューソート」運動が主張する「思考は現実化する」、「引き寄せの法則」といったモデルは、実際に効果的に機能する、と思ってきましたが、自己啓発業界で学ばれている方々で、「思考が現実化する引き寄せの法則」を完全に機能しきれていない方々も多い、と理解しています。

なにゆえに「思考が現実化する引き寄せの法則」が機能しないのか、について、私なりに、以下のように、その原因について分析してみました。

*** 現実を仮想現実化できていない:**

これについては、私は、近年、**GAF**A を作り出せた「西海岸文化圏人」と、作り出せていない日本人のマインドセットの違いをモデリングしてきました。

私は、一番の違いは、前者は「現実を仮想現実化できて」いて、後者は現実を仮想現実化できていない」ことにある、と見てきています。

私は、そのマインドセットの違いのモデリング結果を「メタ心理学」メソッドとして、テクニック化することに成功してきましたが、これらの北岡独自開発のテクニック群を通じて、日本人でも「現実を仮想現実化する」ことができるようになっていきます。

*** 必ずうまく行く方法があるのに、それにサレンダーできない、あるいは行動に移さない:**

ウォレス ワトルズは、『お金持ちになる科学』で、お金持ちになるためには、必ず特定の手順があると述べ、かつ、いくつかの条件を提示しています。

たとえば、第七章では「感謝をすることの必要性」を力説していて、第十一章では、「今ある場所から始めて何らかの行動をし始める必要性」を説いています。単に、「本質的存在」のなかで思考がなされると、その思考によってイメージされたものがつくり出されることがわかっているにもかかわらず、行動を起こさないかぎりは、何も起こりえない、という警告を発しています。

スーフィー教 (ユダヤ教の密教学派) には、以下のような比喩的なストーリーがあります。

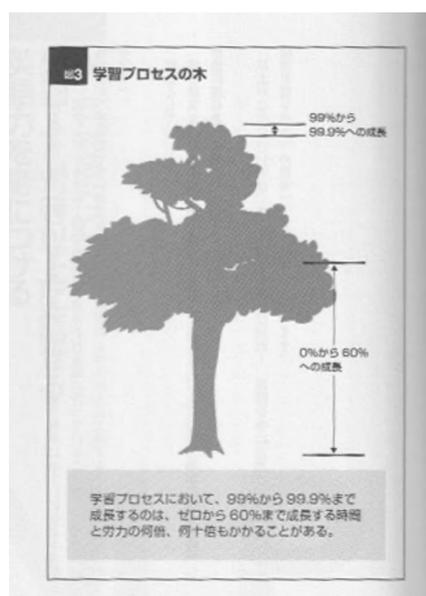
解脱者であるある「ラビ」(ユダヤ教指導者)が、求道者に「単に神を信じて、すべて神に任せなさい」という教えを与えた時、この求道者は、砂漠の中で、テントの側にラクダを放し飼いにして「神様、どうかラクダの面倒を見てください」と祈った後、眠りにつきました。翌朝、目覚めると、ラクダは逃げ去っていたので、ラビに「あなたの指示に従ったのに、神様はラクダの面倒を見てくれませんでした」とクレームを入れました。ラビは、「確かに神はすべての面倒をみてくれます。ただ、神は、そのためには、現象界において、人間の手が必要で、ラクダについても、杭に繋ぎ止めておくという人間の側からの介入がなければ、人間を助けることはできません」と諭しました。

すなわち、神のワークは、人間の側からのなんらかの行動を必要としている、ということになります。

* ブルース リーの言う「1万通りの蹴り」しかできない:

武術の天才ブルース リーは、生前、「俺は、1万通りの蹴りを(1回づつ)行う奴は怖くない。ただ、俺は、一つの蹴りを1万回やる奴だけは、怖い」という名言中の名言を残しています。

これについては、私は、以下にある「学習樹図」(北岡著『5文型とNLPで英語はどんどん上達する!』(ダイヤモンド社刊)から引用)を引き合いに出して、「0%から60%への学習の成長に必要なテクニックと99.99%から99.999%に進む学習の成長に必要なテクニックは、まったく同じ基本的テクニックである」と主張しています。



すなわち、神経科学によれば、人間の脳には 150 億個の脳神経細胞があり、その一つ一つが 2 万個の他の脳神経細胞と繋がる可能性があり、この可能性 (150 億の 2 万乗) の数は、「知られている宇宙にある原子の総数よりも多い」ということです。

ということは、かりに NLP の演習等で、脳神経細胞系統の「粗野レベル」での問題解決が可能になったとしても (ブルース リーの言う「1 万通りの蹴りを (1 回ずつ) 行う」レベル、および、私の言う「0% から 60% への学習の成長」のレベルのことです)、いつなんどき、「微細レベル」で、「アンフィニッシュド ビジネス (未処理)」の脳神経細胞一個がトラウマ的な発火をして、その化学電気反応が瞬時に脳網全体に波及して、「脳全体がプログラミングに憑依されて」しまうか、はわかりません (ブルースリーの言う「一つの蹴りを 1 万回やる」レベル、および、私の言う「99.99% から 99.999% に進む学習の成長」のレベルのことです)。

通常、人々は「一つの蹴りを 1 万回やる」前から、「処理すべき脳神経細胞群は『無限』にあるので、私には、この『永遠』の繰り返しが耐えられない」と思い、この努力を初めから放棄してしまうケースが多いようです。

私には、子供の頃 (四歳児までに) 確立した思考習慣 (これを確立するために、ありとあらゆる努力と試行錯誤をしたはずなのに、確立した後は、すべてその「苦しみ」を忘れてしまっている上で) を (たとえそれが無識的であれ) 永遠に繰り返してきていて、今後も永遠に繰り返していくことには、疲れを感じもしないし、その未来永劫の反復動作をいっさい問題視しないことは、究極の逆説に思えます。

私は、天才になれる方は、文字通り、愚者以上に「愚鈍」で、「一つのことを『意識的に』永遠に反復できる人」だと思っています。

*** どれだけアフメーションを繰り返しても、効果がない:**

私自身、私の師匠の「マントラ (アフメーションを含みます) を繰り返すと、意識が鋭敏ではなく、麻痺し、眠ってしまう傾向がある。その意味で、『コココーラ、コココーラ』と唱えることと何の違もない」の教えに基づいて、「マントラ ヨガ」は、長年にわたってずっと否定的に見てきていました。

ただ、つい最近、ワトルズの『お金持ちになる科学』読み始めた直後、「金運上昇」関連の邦書を別の方から推薦され、この本の内容を研究してきています

が、その本の中で薦められている易経関連のマントラ（アフアメーション）を唱え始めています。

私自身、そのマントラの効果を実感してきていますが、アフアメーションが最大の効果を発揮するには、意識状態下よりも、入眠時催眠状態や出眠時催眠状態のような「意識と無意識の垣根が取れている時」に唱える必要があると思います。

また、上記に、

「いつなんどき、『微細レベル』で、『アンフィニッシュド ビジネス (未処理)』の脳神経細胞一個がトラウマ的な発火をして、その化学電気反応が瞬時に脳網全体に波及して、『脳全体がプログラミングに憑依されて』しまうか、はわかりません。」

とありますが、このような「脳神経細胞一個がトラウマ的な発火」をするタイミングを見計らって、「パターン中断」的に、マントラを唱える、というのも、一つのコツになるのでは、と思いました。

* 「二足草鞋」のまま精神世界にコミットしようとする:

国内では、自己啓発系の学習者の多くは、会社勤めで、独立するためにさまざまセミナーを受講している、いわゆる「二足草鞋」の方々ようです。

私個人は、このような「生活の保証」のある場合は、「思考が現実化する引き寄せの法則」に関連したマントラ（アフアメーション）を唱え続ける、といったコミットメントが欠ける場合があると思います。

私自身、1981年に国内の大学を卒業した時、「当時の『ノマド』生活」をすべく、フランス語通訳になって、3年間北アフリカのサハラ砂漠に滞在し、それこそノマドになりました。

仮に今私が、まだ若く、「現代の『ノマド』になる」と決心したとしたら、間違いなく、PC一台で世界のどこでも24時間働ける「コンピュータプログラマー」になっていたと思います。

ということで、私には、「自己啓発系セミナーに参加して独立したコーチになる」と考える前に、世界中どこに行っても食っていけるような職を手につけた上で、まず独立を考えるべきではないか、と思えています。

ちなみに、昨今の ChatGPT を始めとする GAI (生成型 AI) の出現のため、普通のレベルの通訳／翻訳者やコンピュータ プログラマー (およびグラフィックデザイナーも含まれると思います) は、今後、ほぼ全員淘汰されていく、と思っています。

ただ、GAI が生み出すコンテンツには微細な間違いが含まれている可能性がある (GAI の専門家によれば、ChatGPT は、わざと間違いを犯して、人間を試すこともあるようです (!))。たとえば、ホリエモンと実業家の佐藤航陽氏との Youtube 対談では、ChatGPT は、(おそらく「アカシックレコード」レベルで?) 「すべてを知って」いて、単に小学校五年生級の知識脳の人間に合わせて、情報をアウトプットしているのではないか、ということまで示唆されています!)、そのコンテンツを精査／査定できるレベルのプロフェッショナルの需要だけは、今後も継続していくと思います。

たとえばですが、私は、過去、フランス語と英語の通訳／翻訳業に従事していましたが、英語翻訳の世界で「プロ」と呼ばれるための基準は、該当の人が、「ある英語の文章を読んだ時、瞬時に、統語／文法がめちゃくちゃなので、いっさい辞書を引く必要がないのか、あるいは、統語／文法が形成妥当なので、辞書さえ引けば、その文章がちゃんと理解できるようになるものかどうか、を瞬時に判断できるだけの英語力をもっていること」と定義してきています。

この基準は、他の専門分野にも、そのまま当てはまると、私は考えていますが、おそらく、「思考が現実化する引き寄せの法則」が機能しないと思う自己啓発系の学習者は、同様なマインドセットをもって自分自身の「専門職」についているはずなので、その専門分野で、私の定義する「プロ」になりきっていないはずです。

なので、(「急がば回れ」的に) 少しは時間がかかるかもしれませんが、「思考が現実化する引き寄せの法則」が効果的に機能するための必要最低条件として、「引き寄せの法則」を実践する「前」に、まず、自分の専門分野でのプロになることを考え、そのための努力をした方が、結果的には、「引き寄せの法則」においても、さらには、GAI の時代を生き抜くこと (!) においても、大きな成功を収めることになるのかもしれませんが (笑)。

5. 後書き

以上は、最近、改めて、「ニューソート」や「引き寄せの法則」を考察し直して、私が考えたことをまとめた内容でした。

実は、インドでは、「四住期 (しじゅうき)」という考え方があります。

これは、人生を、「学生期 (がくしょうき)」、「家住期 (かじゅうき)」、「林住期 (りんじゅうき)」、「遊行期 (ゆぎょうき)」の 4 つの時期に分けるモデルで、それぞれのステージにおける規範に即した生き方をすることで、幸せな人生を送れるとされています。

このモデルによれば、8 歳 ~ 25 歳頃が社会に入る前の「学生期」で、25 歳 ~ 50 歳頃の定年頃までが社会生活をして家族を作る「家住期」で、50 歳 ~ 75 歳頃までが子どもが自立し、定年を迎えた後にどのように生きるかじっくりと考える「林住期」で、75 歳からは、この世に対する執念をなくし、巡礼を通して死ぬ場所や悟りを求める「遊行期」であるとされています。

実は、私は、幼児期から人生が「蟻地獄そのもの」だったので、子供の時から四六時中、「マトリックスから出る」、「解脱する」ことしか考えていなかったせいもあって、幸運なことに (あるいは、おそらく残念なことに)、27 歳の時に米国西海岸でインド人導師に弟子入りした時に、「四住期」の「家住期」も「林住期」もスキップして、直接「遊行期」に入ってしまった経緯がありました (このことは、今振り返るからこそそう思うということではなく、1983 年に弟子入りした時に、すでにその自己認識がありました)。

なので、それ以降、欧米に住んでいた時期すべてが私の「遊行期」で、私なりに「解脱」を体験し、その意識状態を NLP で 24 時間継続的にアクセスできるようになってから、2001 年に帰国した次第です。

実は、私の NLP を教える目的は、「遊行期」に獲得した知識とノウハウと後世の人々に伝えることにあつたので、過去 20 余年、私のワークが、「学生期」、「家住期」、「林住期」にいる、「現世的」で、場合によっては IT バブルの中億単位の資金を作ろうとしている、国内のいわゆる「物質主義」の方々に、私の教えが響かなかつた (現代社会人のいったい誰が、山奥の荒屋に住み、究極の精神世界の奥義を極めた仙人の教えを請おうとするのでしょうか?) のも、無理はありませんでした。

実は、本書の第三章の冒頭で、

「ロンダ バーン著の『ザ シークレット』の「種本」は、ウィリアム ウォーカー アトキンソン著の『引き寄せの法則』(1906年)か、ウォレス ワトルズ著の『お金持ちになる科学』(1910年)か、のいずれかだと言われているようです。」

と書きましたが、以前、私は、特に、「インド人ヨガ行者としての『ラマチャラカ』の筆名で書いた、「ラージャ ヨガ」を含むインド思想に関する書籍」を書いたアトキンソンは、かなり研究した一方で、(私には「物質主義」、「拝金主義」に思えた)ワトルズ著の『お金持ちになる科学』にはあまり興味はなく、つい最近までワトルズを研究したことがなかった(実は、カーネギーもナポレオン ヒルもそれほど興味はありませんでした)のは、ある意味、私の中では、当然といえば当然でした。

ただ、これまで物質主義とは無縁だった私が、今回、「お金持ちになる科学」を本格的に学び始めたわけですが、「山奥の荒屋に住み、究極の精神世界の奥義を極めた仙人」が市井に降りてきて、「思考は現実化する引き寄せの法則」を本気を実践し始めたら、半端ではないものが生まれるのではないかと、思っているところです。

他にも、エネルギーの流れが変わってきていて、偶然、「CIA 陰謀論系」の Youtube 広告動画を見る機会があり、(いわゆるオカルト力を育成することができるという)このメソッドが非常に興味深いと思い、また、学習教材が廉価だったので、オーディオ教材セットを購入し、現在、自己訓練を始めています。

ということで、「ニューソート」、「金運上昇」、「CIA 陰謀論系」と、立ち続けに(「自己啓発系」ではないにしても)「Personal Development 系」の方法論を同時に学習/自己訓練し始めることになったのですが、これらの方法論の自己適用の結果、いったい何が生まれるか、楽しみでなりません。

以上の私に関する最新の情報とノウハウは、かなり奥義的な側面もありますので、それらの詳細な情報は、クローズドの環境で、個別個人セッション ワークを通じてのみクライアントの方にお伝えしたいと思っているところです。

以上、今回の北岡特別エッセイは、いかがでしたでしょうか。

なお、本エッセイは、ChatGPT 等を使ったものではなく、生身の人間が執筆したものです。